

## カント哲学の独断的解釈

朝日義郎.

2012/02/15

2012/02/18 改訂

2013/03/20 改訂

### I カントの認識論（純粋理性批判）

#### ① カントの問題意識

カントの時代には既にニュートン力学と純粋数学が成立していた。この成立はアприオリな（先験的）総合判断(註 1、2)によるとカントは考えた。そこで、カントはアприオリな総合判断は如何にして可能か？という問題意識を持った。ということは、形而上学もアприオリな総合判断をするから、同時に彼は形而上学が学問として成立する条件の解明に着手したことになる。

#### ② 彼の考え

(a) 次のようにして認識主体（我々）は対象の存在を知る。

対象の存在認識は感性と悟性の共同作用によって成立する。前者のアприオリ形式は時間と空間である。後者のアприオリ形式は悟性概念（カテゴリー＝

対象物の有りようを分類する枠組み)である。12 のカテゴリ (同一性、複数、非存在、様相など) がある。

(b) アプリオリな感性と悟性の共同作用によって対象の存在を知った後に、認識主体はアプリオリな総合判断を行なう(我思惟す—デカルト)。このときに認識主体が思惟に用いるもの意識をカントは先験的統覚或いは意識一般と名付けた。

(c) かくして、認識は対象に依存するのではなくて、対象が認識に依存する。これは思想の上でのコペルニクスの転回である(と彼は言った)。

③ 思想上のコペルニクスの転回と言う表現を使って、転回後見方の重要性、即ち、“対象が認識に依存する”という見方の重要性をカントは強調した。にもかかわらず、どの哲学解説書にも、彼の言うコペルニクスの転回についての詳しい説明はない、単に 2~3 行の言及があるだけである。何故か？以下にカントの主張したコペルニクスの転回について、小生の独断的解釈を試みる。

## II 小生のカント哲学の独断的解釈

思想上のコペルニクスの転回と言うショッキングな表現を使って重要性を主張したのであるから、転回後見方はカント哲学全体を貫き且つ支配している筈であると小生は考える。

① “対象が認識に依存する”とは具体的にはどういうことか？小生の答えは次

である：

**{人は対象に向けて波を発射し、返ってきた反射波を解釈することによって対象が何であるかを判断する(or 定義をする)。}**

従って、転回後見方に於いて認識主体は能動的であることが必要である。他方、転回前見方に於いては、認識主体は己を空しゅうして対象が送ってくる波を受動的に受け取る。

以下に於いて、転回前見方、即ち、“認識は対象に依存する”を波**受信**見方と呼び、転回後見方、即ち、“対象が認識に依存する”を上記解釈に基づいて波**発受信**見方と呼ぶこととする。

② ある一つの認識に於けるそもそもの始まり

波受信見方 : そもそもの始まりは絶対者(註 3)である。

波発受信見方 : そもそもの始まりは我々の波発信である。

③ カントの考え：

波発受信見方は、主体的に且つ能動的に、ものの定義しようとする意志を必要とする。他方、波受信見方は、受動的であって、主体的にもものの定義をしようとする意志はない。波受信見方に於いては、ものの定義は、絶対者によって

なされる(中世的思考様式)。

カントによれば、波発受信によって我々が分かるのは現象だけであって、物自体は我々にはわからない。(物自体なんて何ですか？ニーチェ)

④波発受信見方に於ける論理構築：

カテゴリ波を発受信して、ものの存在を知った後に、人は総合判断をする為に総合判断波を発受信する。総合判断反射波の解釈に基づいて知識拡大が行なわれる。知識拡大とはとりもなおさず**論理構築**(註 4)である。**論理構築**の推進内容は総合判断波を発射する者のキャパシティに支配される。

⑤カントが哲学的意義付けを試みる前に、ニュートン力学と純粋数学とは既に成立していたのであるから、彼の先験的哲学は後追いである。この事実は、新しいことを行なうには我々自身が哲学的であることが必要であることを示している(と小生は思う)。

⑥現代の理工学者が日常的に研究に於いて行っていることは波発受信見方に即している。即ち、彼らは光波、中性子波、etc を発射し、返ってきた反射波の解釈によって対象を解釈する。対象は、光波には光波特有の反応を、中性子は中性子波特有の反応をする(断面積を与える)。次に、波発受信で得た実験結果を解釈する為に、彼らは今度は自分の認識波を実験結果に向けて発射する。

⑦波の発受信を行なっているのは理工学者・形而上学者に限らない。人は自分の認識波を発射し、返ってきた反射波を自分のキャパシティで解釈する。人が他人を解釈する時さえも、実は自分自身をみている。このときの解釈は、波をあてられた人のキャパシティがあてた人のキャパシティを超える場合は的外れとなる。各自の認識波は各自の人となり、才能を表す。人は自分の発射波を磨く必要がある。波発信がなければ独創性もない。

⑧小生の中学時代にある先生が“眼光紙背に徹す”というほどの眼力でもって読解に努めよと授業中に我々生徒に教え諭した。この“なせばなる”式の教えは極めて東洋的であると思われる。人の発信波が現実には紙を突き抜けることがあるかどうかは定かでないが、もし発信波が紙を突き抜けたら反射波は帰ってこないでカントの考えは成立しない。だから、カントに言わせればこの教えはトンチンカンということになる。“眼光紙背に徹す”ならば、眼光の強度を下げ、紙から反射波が帰ってくるようにするべきであるとカントは言う。小生は考える。

### Ⅲ カント後の哲学(ドイツ観念論)

ドイツ観念論が目指すはカント哲学の分裂(純粹理性批判、判断力批判、実践理性批判)の解消である。特に、意志の哲学が展開される。カントも実践理性批判に於いて意志を扱ったが、そこでの意志は、行動を実践する際に、理性が欲望、即ち、“やりたい放題”を抑制する意志である。他方、ドイツ観念

論が扱う意志はより広い。

ドイツ観念論でも波発受信見方は保持される。

① フイヒテ：主観(先験的統覚、自我)を原理とする。

② シェリング:客観(対象、自然)を原理とする。

自然の対象化をしているとしてカント哲学に彼は異議申し立てをし、自然が欠けているとして、フイヒテ哲学に彼は異議申し立てをした。

カント哲学の両端である自我と自然とは精神によって支配されていると彼は主張した。この考えは自然が生きているという東洋思想(山川草木悉皆仏性)に通じる。

③ ヘーゲル:

“自分より前は哲学は悟性の段階にあったので主観と客観の対立の解消ができなかった。この対立の解消はシェリングによる試みでも不十分であって、哲学は理性によらねばならない。理性の方法とは自分の提案する弁証法(註 5)である。”

弁証法的変化の行き着く先は絶対精神であると彼は主張した。彼の主著“精神現象学”のタイトルは何を意味するか?“精神”は自我も非我也も精神であるというシェリングに触発され、“現象”は我々は現象のみを知りえる、物自体

は知りえないというカントの考えに触発されたと小生は考える。従って、“精神現象学”というタイトルを持つこの本は我々の知りえる全てを説明すると彼は主張している？－誇大妄想

④ フォイエルバッハ: 神は人間の発明である。

人間が発明した神に額づくことによって人間の疎外が始まったと彼は考えた。

(人間は神を発明したのではなく、人間は神の存在に気付いたのだと小生は考える。だから、彼の考えに小生は賛成できない。)

⑤ ショウペンハウエル: 自然の力は盲目の意志として人間行動に現れる。

#### IV 結び

カント哲学のポイントは認識主体による認識波の発受信である。この考えが現代科学の赫々たる成果の根底にある。

波発受信法はものの定義をしたいという意志に基づく。本質を究めたいというこのような意志は、既に古代ギリシャにおいて存在したが、中世には忘却の彼方にあつた。当時進行中の思想上の転回をいち早く看破し、先験的波発受信法の哲学的裏付けを最初に行なったという意味でカントは偉大である

現代哲学では波発受信が随所に顔を出しているように小生には思われる。例えば、(a) シェリングの自然解釈は波発受信見方を批判する見方に基づいている、(b) ニーチェのペースペクティヴィズムは波発受信による判断が一面的であ

ることを注意喚起している、(c)フッサールの現象学の主概念である志向性は認識波発射のことである、(d)ハイデッカーの使う存在企投はカテゴリー波発信のことである、と小生には思われる。

波発受信見方を反定立とした弁証法的発展を西洋は経験したが、東洋は体験しなかった(註 6)。現在でも、日本では波発受信見方を学校で教えることはないし、社会でも議論の俎上にあげることは殆どない。

## V エピローグ (影の声)

無意識かもしれないが波発受信はだれでも、動物さえも(註 7)日常的に、おこなっているから、東洋が波発受信見方を反定立とした弁証法的発展を体験することがなかったこと、即ち、カントのような人を持たなかったことを取り立てて重要視する必要はまったくない。カントが自分の指摘を表現するのにコペルニクス的転回という大げさな語を使ったのは哲学者の悪い癖だ。

カント哲学は全てを対象化する。つまり、自然を解析の対象、征服の対象とする。この結果、現代文明は赫々たる成果をあげたが、他方、人間を傲慢にした(シェリング)。現在、自然の逆襲が進行中である。

しかし、アприオリな波発受信見方を最初に哲学的に裏付けたカントの功績を認めざるを得ない。



註 1. 先験的＝経験に先立っている。

註 2. 判断には分析判断と総合判断とがある。前者は主語の内容を述べるのみで知識を広げないが、後者は知識を拡大する。“2は数である”は分析判断である。“ $2 + 3 = 5$ ”は形式論理のみでは証明できないから総合判断である。

註 3. 神さま、仏さま

註 4. 総合判断での知識拡大、即ち論理構築が“正しい”結果をもたらすことを保証するのは何かが問われる。合目的性か？論理構築ができたという事実そのものか？ 神の存在か？

註 5. 弁証法＝変化は正定立・反定立・総合定立の3段階で起るという論法”

註 6. 現代哲学の解説書によれば、構造主義、ポスト構造主義と哲学の発展が現在進行中である。ところが、これら解説書には日本人の名がない。日本人の寄与がないとしたら、その理由は、弁証法的発展段階の差に起因するのか？それとも、日本人の寄与があるけれども単に知られていないだけか？

註 7. 動物は獲物や雌の探索のために波発受信を行なっている。しかし、動物の知性レベルは低い。動物が総合判断が出来るはずがないし、論理構築が出来る筈がない。